学校長様
児童支援専任・生徒指導専任様
特別支援教育コーディネーター様
養護教諭様

令和３年７月 14 日　第２号

横浜市立浦舟特別支援学校

連携支援だより

新型コロナウィルス感染症拡大予防の生活のもとで、２度目の夏休みを迎えようとしています。学校行事や関係機関との支援会議など、浦舟特別支援学校でもこれまでとは違う形態を工夫しながらの教育活動が続いています。

さて、連携支援だより第２号は、先月行われた特別支援教育総合センターとの共催研修での学びをご紹介いたします。

第１回　「病弱教育と人権」
～揺らぎを抱える子どもに寄り添う～
国立がん研究センター中央病院　緩和医療科
ホスピタルプレイスタッフ　公認心理師　　小嶋　リベカ氏

喪失と変化と揺らぎ

人、物、場所、身体の機能、目標やアイデンティティなど、人は失うことで生活や周囲との関係性が変化します。ジェンガのように抜ける（失う）ことでどんどん形が変化し、バランスが取れなくなってしまいます。そのバランスを取ろうとして、揺らぐのです。揺らぐ子供の SOS 反応として、

●身体の反応（頭痛、腹痛など身体の痛み）
●心の反応（一見何もなかったようにふるまう。気遣いから良い子にふるまうこともある。）
●行動上に現れる反応（登校しぶり、注意散漫、暴力など周囲が困る行動）

などがあります。きちんと揺らぐ体験を重ねることが大切です。

寄り添う意義

「乗り越えること」「回復を目指すこと」は、支援になりにくいとのことです。揺らぎを見せられる安心できる関係づくりを大切にし、子どもを見守り、寄り添うことが大切です。その際大事なことは、次の「寄り添う姿勢 ABC」です。

●Accepting（受容する）・・・相手を評価したり、解釈したりしない。
●Being（相手のありのままの姿に寄り添う姿勢）・・・言動、行動の理由がわからないままであっても、変化をせかさない。
●Caring（子どもの力を信じ、思いやる姿勢）・・・相手のあらゆる表現を感じ取ろうとする力。

安心できる関係づくり・コントロール感

安心できる関係とは、「子どもとほどよいキョリを保ち、相手のペースに合わせて存在する『伴走者』となること」です。また、今までのあたりまえがそうではなくなるなど、大きな変化を体験したときに起こるいたみによって、自分がここにいる感覚を失い、コントロール感がもてなくなることがあります。自分の存在を受容される感覚はコントロール感につながります。コントロール感の源は、やはり安心できる人が身近にいることと、そして、気持ちを表現できる手段があることなどです。

最後に支援者のセーフティネットにもふれてくださいました。教員も、自分の揺らぐ気持ちに気づき、大切にできること、ねぎらえることが大切です。

揺らぐ子どもを長く支援してきた小嶋先生の講演から、あるがままの子どもに寄り添う大切さを改めて感じさせていただきました。特別支援教育総合センターでご参加された先生方、オンラインでの受講にご協力いただきありがとうございました。

研修会・参加方法変更のお知らせ

7 月 28 日（水）の「医療機関からみた不登校」の参加方法が変わりました。

当初、特別支援教育総合センターでサテライト形式となっておりましたが、Zoom によるオンライン受講に変更になりました。参加申込者には特別支援教育総合センターより、ミーティング ID 等が送られてきますので、それでお入りください。また、ミーティング ID 等は、参加者にのみお知らせしますので、外部への公開はお控えください。（Leaf に登録しているアドレスに連絡が行きますので、定期的にご確認をお願いいたします。）

急な参加方法変更で申し訳ありませんが、ご協力をお願いいたします。

第 2 回「学校と医療の連携」
～医療機関から見た不登校～
日時：令和 3 年 7 月 28 日（水）15:00～16:45
各校にて、各自参加
講師：横浜市東部地域療育センター　所長　　高橋　雄一　氏
　　（元横浜市立大学附属市民総合医療センター　精神医療センター）

＊研修管理システム Leaf からお申し込みください。　　研修コード　21tk48

教育相談について

病気が理由で、市内の病院に入院しているお子さん、登校ができていても病気に対する配慮が必要なお子さんについて、教育相談を受け付けています。

学校だけでなく、保護者からの相談も受け付けておりますので、ぜひご紹介ください。

担当：浦舟特別支援学校　特別支援教育コーディネーター　鈴木　　TEL　243-2624

＊お手数ですが、全職員への回覧をお願いいたします。